



1. 自然と共にバリらしい建築や歴史を感じながら楽しめる会場「パリ・フェスティバル・パーク」 2. トークイベントでは日本から倉本仁氏、柳原照弘氏が登壇し、日本のデザインにおける伝統と革新をテーマに語った。会場は元タシアターとして使われていた場所 3. 写真手前は、マーケットの有望性を鑑み、今回初めて出展を決めた新潟・高三條の生産者たちによるコレクティブ「FOR THE METAL PEOPLE」。クラフトマンシップを伝える会場デザインは日本人クリエイティブ・ユニット「SPREAD(スプレッド)」。監修は日本人クリエイティブ・テクノロジースタジオ「method(メソッド)」によるもの。奥のブースはインドネシアブランド「OAKEN」(3点撮影/武田修美)

各国の伝統やアイデアを共有する インドネシア発のデザインフェスティバル「Jia CURATED」

藤本美紗子 (Inu主宰、ブランディングディレクター)

世界中の観光客に人気の地、インドネシア・バリ島。ここは、人情にあふれ、明るく、ビジネスマインドと活気に満ちている。国としては約2億8000万人の人口規模を誇り、国外から訪れる観光客はバリ島だけで約600万人に上る。ツーリズムで話題となることが多いバリ島だが、今回は少し視点を変えてクラフト、デザイン、カルチャーをテーマにしたデザインフェスティバル「Jia CURATED (ジア・キュレイトド)」についてレポートする。

バリ島のロケーションを活かした会場と展示

今年で4回目となる当フェスティバルは、ビーチリゾート地のひとつであるサヌール・エリのバリ・フェスティバル・パークを会場にして、8月14日から18日まで開催された。バリ島の工芸や産業をプロモーションしながら、国内外のクリエイターとの交流を通じ、アイデアや技法、伝統の共有を促進する狙いがある。それによってクリエイティブ環境を豊かにするべく、2022年から開催され

ており、来場者数は昨年の約2倍となる1万2000人に上った。主催者は、バリ島を拠点にショップやスタイリングサービスを展開する「Jia COLLECTIVE (ジア・コレクティブ)」である。

会場は約1万㎡におよび、国内外ブランドによる150の展示を始め、24組のインドネシアの建築家による模型展示、アートインスタレーション、リサイクル素材を用いた持続可能なデザインが展示された。更に、バリ島を代表する飲食店の味が楽しめるエリアに加え、午後には世界各国から集まったクリエイターによるトークイベント、夜にはバリ島を中心に活躍するミュージシャンやダンサーのパフォーマンスも披露され、一日を通して楽しめるフェスティバルとなっていた。

このフェスティバルでは「alvinT (アルヴィン・ティー)」や「OAKEN (オーケン)」など、インドネシアブランドとの出会いはもちろん、日本からはクラフトユニット「Straft」が参加。トークイベントではSabine Marcelis (サビーネ・マルセルリス)、Fernando Laposse (フェルナンド・ラポッセ) といった世界的デザイナーの話も聞く

ことができ、デザインフェスティバルとしての成熟度を感じた。

また、会場となったフェスティバル・パークも非常にユニークである。元々はテーマパークとして建設され、20年以上廃墟となっていた場所。壁はグラフィティにまみれ、周りは熱帯雨林に囲まれている。ポーッと歩いているとがれきや段差につまずいてしまいそうな場所も多々あった。更に、トークイベントは元々シアターだったところを利用しており、非日常的な雰囲気非常に印象的であった。

フェスティバルのにぎわいを参加者たちが作り出す

実際に参加してみると、フェスティバルの中核にはコミュニティーがあり、参加者一人ひとりがその場を盛り上げようとしていることを肌で感じた。「Gotong Royong (インドネシア語で『力を合わせて物事を成し遂げる』の意)。ひとりだけで作り出せないことを、フェスティバルとして創造できれば」と語るのはフェスティバルを立ち上げた創設者のひとり、ブディマン・オング氏だ。

出展者や登壇者とは事前に必ず対話を重ね、相互理解を深めた上でフェスティバルに参加してもらうようにしているという。

「インドネシアにとってプロダクトデザインの歴史は浅い。一方で、クラフトや生産者がたくさんいること、建築やインテリアデザインの需要が高いことから、シナジーが生まれそうな人々を招いて相互理解を深めたい」(ブディマン氏)

「良いデザインフェスティバルの条件は？」との質問にブディマン氏は、「キュレーション、コミュニティ、長期的な世界観の積み重ね、そして参加者が場の空気をつくり出すことにある」と答えた。

インドネシアは人口の約半数が30歳未満という「人口ボーナス」期にあり、多くの学生が海外でデザインを学んでいる。今後は若い世代の取り込みや、海外からの参加者増加に主催側も期待を寄せる。フェスティバル自体も国柄を反映しているのか、デザインとコミュニティーに対する温かい視点と挑戦する姿勢によって、急速に成長していく可能性を感じさせた。一度訪れてみると、デザインやものづくりのヒントが得られるのではないかな。